



# 古道が紡ぐ物語



## 剣豪・柳生一族の里を歩く—柳生街道編②

～夜支布山口神社（奈良市大柳生町）から柳生の里（奈良市柳生町）まで～

柳生街道は、春日大社の神山である春日山の南麓から剣豪・柳生一族の里である柳生に至る、道のりおよそ 20km の街道です。前回訪ねた「滝坂の道」（春日山南麓から円成寺まで）に引き続き、今回は夜支布山口神社から柳生の里を訪ねます。街道沿いには柳生一族ゆかりの史跡や、伝説を残すスポット等が点在しており、いにしへの剣客たちの面影を偲ぶことができます。

### 剣豪・柳生一族の里を歩く

■円成寺から夜支布山口神社、南明寺へ

忍辱山円成寺を後にして柳生街道を東上すると、夜支布山口神社（奈良市大柳生町）に至る。

柳生の異称である「夜支布」の名を冠した同社は、素戔嗚命を主祭神として祀る式内社である。同社には、集落の長老の家々に1年交代で分霊を奉祀する「廻り明神」と呼ばれる珍しい行事が伝えられる他、同社に奉納される「大柳生の太鼓踊り」は700年の伝統を有し、県の無形民俗文化財にも指定されている。

摂社には、古代の巨石信仰を伝える式内社・立磐神社がある。巨石の前に築かれた現社殿は、1744～1747年の春日大社の式年遷宮に伴い移築された春日大社本殿（第四殿）であり、古い春日造を現代に伝え残す建築物として、国の重要文化財の指定を受けている。

しばらく行くと、薬師如来坐像を本尊とする南明寺（奈良市阪原町）に至る。かつては広大な寺域に堂塔伽藍が立ち並んでいたというが、現在は鎌倉中期の創建という本堂を残すのみである。

南明寺の付近には、「おふじの井戸」と名付けられた井戸がある。柳生但馬守宗矩がこの地を通りかかった際、この井戸で洗濯をしていた村娘のおふじに、戯れに「桶の中の波はいくつあるか」と尋ねた。臆することもなく「お殿様がここまで来られた馬の歩数はいくつですか（数えられないのでわかりません）」と尋ね返すおふじ。その才気と器量に宗矩は感心し、後に妻として迎えたという。

この逸話は、「仕事せえでも器量さえよけりやおふじ但馬（但馬守宗矩）の嫁になる」として里歌にも歌われ、現代に伝わっている。

■「正長元年柳生徳政碑（瘡瘡地蔵）」

柳生街道沿いの小山の中に、瘡瘡地蔵（奈良市柳生町）と呼ばれる像がある。石仏の頭が一部剥落し、瘡瘡（あばた）のように見えたのが命名の由来とされる。この地蔵は「正長元年柳生徳政碑」として、全国的に知られている。

1428（正長元）年、近江の馬借（輸送業者）らが徳政（借金の帳消し）を求め蜂起した一揆は、近江一国に留まらず京都市中をはじめ畿内一帯に波及し、奈良においては大和国守護に補任されていた興福寺が正式に徳政を認める事態となった。いわゆる「正長の土一揆」であり、日本で初めての



夜支布山口神社（左）



南明寺本堂（右）

庶民による蜂起として知られる。

瘡瘡地蔵の脇には小さく、「正長元年ヨリ／サ  
前は神戸四箇郷に負目あるべからず  
キ者カンへ四カン／カウニヲキメアル／ヘカラス」

と碑文が刻まれている。春日大社の社領であった大揚生（柳生）庄、小揚生庄、坂原（阪原）庄、  
おおし 邑地庄の4カ郷の郷民が徳政を勝ち取ったことを示す貴重な遺物として、国の史跡に指定されている。

### ■盆地に開けた柳生一族の故郷・柳生の里

さらに北東に進んだ山間の盆地の中に、隠れ里のような小集落が現れる。剣豪で知られる柳生一族の故郷・柳生の里である。

柳生一族が剣豪として名を天下に轟かせるのは戦国時代末期、柳生石舟斎宗厳の時である。宗厳は、新陰流の開祖で剣聖との誉高かった上泉信綱に師事して腕を磨き、やがて皆伝を受けた。1594（文禄3）年、京都を訪れていた徳川家康に招かれた際に、家康の面前で奥義「無刀取り」を披露。その剣技が家康に激賞され、その場で出仕を要請されたものの、高齢の身を理由に辞退し、代わりに5男の宗矩を推挙した。

家康に仕えた宗矩はその後勃発した関ヶ原の戦いでも活躍し、2代将軍・秀忠の兵法指南役に抜擢。先祖代々の旧領を回復し2,000石の旗本となった後、3代将軍・家光からも兵法指南役として絶

大な信頼を得て、初代の幕府惣目付（諸大名の監察官）に任ぜられ、一介の剣士の身からついに1万石の大名にまで上り詰めた。

宗矩はまた『兵法家伝書』を著し、「活人剣」や「剣禅一致」等の、後代の武道に通じる思想を体系的にまとめ、兵法を太平の世を統治するための術として大成させたことでも知られている。

柳生氏は、将軍家兵法指南役としての役目柄、定府大名（参勤交代を免除され江戸に定住した大名）であったため、藩経営には国家老があたった。藩政が執られた柳生藩陣屋跡から少し北に、1826（文政9）年に国家老に就いた小山田主鈴の隠居屋敷が残る。

屋敷は後年、作家・山岡荘八の別邸となり、柳生宗矩の生涯を描いた小説「春の坂道」の構想がここで練られた。現在は奈良市に寄贈され、「旧柳生藩家老屋敷」として柳生藩に関する資料等を保管・公開している。

柳生の里にはこの他にも、宗厳が天狗と間違えて斬ったという伝説の残る巨石「一刀石」や、柳生氏代々の菩提寺「芳徳禅寺」、宗矩の長子・三厳（柳生十兵衛）が多数の門下生を指導した「正木坂道場跡」等があり、剣客たちの面影が偲ばれる。

（柳生街道編終わり）（太田宜志）

正長元年柳生徳政碑文を残す瘡瘡地蔵（右）



旧柳生藩家老屋敷前より柳生集落を望む（左）

### 柳生街道（剣豪の里）の道のり

